

福島県男女共生センター広報誌

未来館 *miraikan news* NEWS

Contents

特集:全国女性会館協議会第61回全国大会 in 福島
事業レポート:女性の人権啓発事業

2018 VOL.66



全国女性会館協議会第61回全国大会 in 福島

「課題に向き合い、地域につなぐ、私たちの使命」

開催日：平成29年12月2日(土)～3日(日)

全国女性会館協議会全国大会は、会員相互の情報交換・意見交換と研究協議の機会とし、毎年全国各地の会員館で行われています。今回福島県での開催となり、震災後の福島の現状について発信するとともに、実際に現地を訪れ、被災地の女性たちとの交流の機会を持ちました。1日目の基調講演とパネルディスカッション、2日目のバス視察について、報告します。

◆ 基調講演 「災害復興と福島の女性たちの今」 講師：千葉 悅子館長

3.11の震災直後、当センターは大きな被害はありませんでしたが、3月12日に県災害対策本部から要請があり、原発に近い病院の入院患者を受け入れました。そして、13日から約1ヶ月は被曝スクリーニング施設の会場となり、自衛隊の除染車両が並び、休館せざるを得ませんでした。放射線の影響がいったいどうなるのか不安を抱えながら、職員は3月23日までは24時間体制で対応しました。

本日のパネリストである富岡町社協の吉田さんからの「女性は車の中やトイレで着替えるしかない」という声を大規模避難所「ピッグパレットふくしま」に派遣されていた県の支援チームの天野和彦さんが受け、さらに天野さんからの要請で4月20日にセンター職員を派遣し、女性専用スペース運営支援の取組が始まりました。女性専用スペースは、同じくパネリストの苅米さんが代表の団体や郡山市内の女性団体に交代制で運営をしていただきました。派遣したセンター職員の「女性たち自らが声を上げ、それを受け行動する支援者がいたからこそ生まれた活動だ」という言葉が印象に残っています。

本日のパネリストは支援する立場の方々ですが、震災前から行つてきた活動をベースに、避難者をつなぐ活動、被災体験を記録する活動、あるいは交流やイベントで被災者を支えていく活動などを実施、発展されました。皆様は、自治体や男女共同参画センターなどとつながりながら、さまざまな方たちをエンパワーメントしてきた蓄積があって、非常事態の中でも自分たちのアイデアを駆使した取組がなされたのだと思います。

◆ パネルディスカッション

藍原： 2011年の東日本大震災から間もなく7年を迎えようとしております。

福島での原発事故はあまりにも大きな出来事でしたので、被災者が相互に支援し合う、つまり、被災者でありながら支援者にもなる必要がありました。今日はそんな活動の第一線にいらっしゃる皆様から、どのように活動され、何を感じているのか、生の声を聞いていただく非常に貴重な機会です。まずは具体的な体験や活動についてお話ををお願いします。

苅米： 2011年4月に福島県男女共生センターよりお話をあり、「郡山市婦人団体協議会」と「しんぐるまさあず・ふおーらむ・

飯館村の佐野ハツノさんは、仮設住宅の女性管理人で、仮設暮らしへ移りながら、着物づくり名人のおばあちゃんを励まして先生役をお願いし、全国から送られてきた着物をリフォームした「までい着づくり」の活動



千葉館長

をされました。同じく飯館村の渡邊とみ子さんは、浪江町や葛尾村の被災女性たちと共に阿武隈地域の食文化を継承し、かつ起業に結びつける「かーちゃんの力・プロジェクト」を立ち上げました。

お二人を育てたのは「女性が元気な村づくり」を掲げ、30年前から「若妻の翼」に取り組むなど、女性を中心になった村づくりをしてきた飯館村だと思います。女性たちが中心となる活動を後押ししたのは社会教育であり公民館だったことはとても重要なことだと思います。

福島を支えている方々がたくさんおられます、リーダーはそう簡単には生まれません。丁寧にリーダーを育てていく必要があります。その役割を担うことが男女共同参画センターに求められる姿だと思います。さらに、市民が、学びから実践につなげていく機会をセンターが積極的につくっていくことが非常に重要になってくるのではないかでしょうか。

パネリスト



苅米 照子さん
NPO法人
ウイメンズスペースふくしま
代表



菅野 瑞穂さん
きぼうのたねカンパニー
株式会社 代表取締役



富田 愛さん
NPO法人ビーンズふくしま
みんなの家
@ふくしま事業長



吉田 恵子さん
富田町社会福祉協議会
事務局
次長



藍原 寛子さん
ジャーナリスト、
Japan Perspective
News株式会社 代表

います。託児もあり、参加するママたちが自分のために時間を使い、自分の気持ちに向き合えるように活動してきました。

このような活動から、私たちは、人に認められるということでどんなに安心するかを知ることができました。自分を知ることと人を認めることが男女共同参画の基本だと思って、今もその種まきをしているところです。

菅野： 私は、このセンターから東に車で20分ほどの場所で有機農業をしています。震災後、希望を失った農家や避難者の方が自ら命を断ってしまうことが起きました。そういう状況の中、生きたかった人、声を届けたくても届けられなかつた人の分まで、この土地でやっていこうと思っています。

実際に来て食べて泊まってもらうことが大事だということで、地域で農家民宿を始めたほか、持続的なつながりを生み出すことを目的に、地域や世代、業種を超えた交流やイベントを行っています。

また、旅行会社と連携してスタディツアーを始め、4年間で300人ほどが参加されました。その後、移住して有機農業に携わっている方や、地域おこし協力隊の任期後も自立した生活を進めている女性もいます。

二度とこのような原発事故を起こしてはならないという教訓を、日本だけではなく世界に発信することには大きな意味があります。農業は種をまかなければ何も始まりません。これからも声なき声を届けるという思いを持って活動してまいりたいと思います。

富田： 福島では、ママやパパはもちろん、さまざまな世代が何らかの傷を負っています。

そこで、それぞれの思いと選択を大切に尊重し合いながら緩やかにつながれる居場所をつくりたいと、「みんなの家@ふくしま」をスタートさせました。

「みんなの家@ふくしま」では、いろいろな不安な思いを安心して話せる「ママカフェ」のほか、食品や掃除機のごみパックの放射線量を測る活動などもしています。また、2017年1月には「みんなの家セカンド」もオープンし、避難をしてきた人と福島に残った人のつながりをつくるきっかけづくりをしています。

私たちが目指しているのは、共に支え合う仲間づくりです。悩みや不安を安心して話せる場づくりを丁寧に重

ねて、福島での子育てや生活に、自分なりの歩幅で進んでほしいと思っています。

吉田： 私たちは、被災地ではない地域で臨時災害FM放送を始めたのですが、それには乗り越えなければならない壁がいくつもありました。それでもできたことの背景には、職員としての熱い思いもありましたが、原動力となったのは町民の方々の切実な声でした。

公的な情報はきちんと手紙で届いているのに、町民の方々から「情報がない」と言われることが何度もありました。よく話を聞いてみると、以前のように暮らしていたら黙っていても入ってくる情報、例えば「どことこの息子さんが今度結婚するんだよ」とか、はっきり言えばどうでもいい話ではありますが、それが一切入ってこないことが人を孤独にしているということがわかったのです。そこで、自分で自分の話をするのなら誰も悪いとは言わないよね、とマイクの前に町民を引っ張り出して自分の話をしてもらいました。

富岡から遠く離れた言葉の全く違う地域に行くと、ものすごく孤独を感じるそうです。そういうとき、ラジオで地元の言葉を聞くと、つながっている実感があつてほつとするのだそうです。

難しい税金の話を役場職員が親しみやすく説明してわかりやすく伝えたり、富岡弁しか話せないおじさんが人気だったりと、放送を通じて人と人をつなげていきました。

藍原： 東日本大震災と原発事故は非常に大規模な災害でしたので、行政や住民など様々な機関がかかわりあって、時には地元で活動されている支援者の方が板挟みになり、なかなか問題の解決につながらないというジレンマがあったと思います。そのようなときどう対応されたのでしょうか。

苅米： 相談コーナーの設置について問い合わせたとき、どこからも回答がなく、仕がないので勝手にやってしまおうと支援物資が来ているその片隅で始めてしまいました。日頃から市役所とか県庁などと連携をとっていたらもっとスムーズにいろいろなことができたのではないかと感じました。

菅野： 私は、何か問題が起きて対立構造になってしまった



とき、中立的な立場から物事を考えたり、対話をしてお互いの意見を聞き合ったりして、お互いの関係性をよりよく保つことが大事だと思っています。

富田：理解し合うことが難しいとき私たちが大切にしていることは、決して自分の物差しで見ないということです。まずは受け止め、安心できる場所としてのルールについてやわらかい言葉でお約束させていただくということを丁寧に重ねていくしかないと思っています。

吉田：役所にお願いをしても、前例がないと断られてしまします。そこで、もしこういう支援が必要だと気づいたのであれば、気がついたセクションが、やれるときにやればいいんだと思います。もし、他のセクションから何か言われたら、そのときはどうぞと渡せばいいのであって、まずはやっちゃんこというようにして進めてきた感じです。

藍原：いろいろと大変なことがありますながらも活動されている、皆さんのモチベーションは何でしょうか。

吉田：大変なことでも住民から「ありがとう」と言われたり、イベントのあと「楽しかったよ」と言ってもらったりする、そして、参加した人たちがにこやかに笑顔でいてくれる、それが私にとっては一番のモチベーションになっていると思います。

富田：避難先の交流会で出会った子どもたちがお利口すぎて心配だったことがありました。でも、みんなの家ができる子どもたちが遊びに来てくれるようになり、いろいろなものを壊してくれて、そんなふうに子どもたちが元気で遊んでいる様子をママたちと一緒にお茶しながら眺めているときが一番うれしいです。月並みな言葉ですが、子どもたちとママたちの笑顔が私の支えだなと思います。

菅野：私のエネルギーになっているのは悔しさです。あれだけの事故が起き、長期にわたって続いているこの問題の解決について、結果がなかなか見えてきません。悔しさをエネルギーに変えながら、今日のように皆さんにお話を聞いてくださったり、このような場をつくってくださる

人がいたりと、そういったとの出会いもまた私にとって非常に大きいと思います。

苅米：スタッフや相談を寄せてくる人たちがいて、孤立無援ではなく共感、共有できるということが大きいと思います。また、電話相談の応援に来てくれるフェミニストカウンセリング学会の人たちが「頑張っているね。力がついてるよ」と言ってくれて、それがとてもうれしくて、エンパワーされて、「私たち、なかなかやれてるじゃん」と思うことで続けられてきたのだと思います。

藍原：最後になりますが、今後またどこかで同じような事故や災害が起ったとき、男女共同参画センターや公的施設、自治体などにどんなことを期待しますか。

苅米：基本は男女共同参画であり、日頃から一人一人を大切にすれば、事故や災害のときにうまくいかないことを減らせると思います。私たちがやっている活動は男女共同参画の種まきです。母親だからこうしなければいけないと思ってきた、でもそうじゃない、私らしく生きよう、そういう気づきですね。一人一人を大切に、認めていく社会になればいいなと思います。

菅野：農業の分野はまだまだ男性主体の部分が大きいですが、女性の活躍を目にすることになってきました。これからは、それぞれの強みを活かした農業分野での男女共同参画が必要だと思います。農業分野における次世代のリーダー育成のため、一緒に考えていく仲間を増やしていきたいです。

富田：避難生活はつらく悲しい出来事でしたが、避難しながらいろいろなものを吸収して戻ってきたママたちが増えてきていると実感しています。男女共同参画センターには、女性たちが「働く」だけではなく、地域の中で活躍できるよう育成したり、バックアップしたりしていただきたいと思っています。

吉田：富岡町民の避難先は46都道府県ですので、皆さんのお住まいの地域にも富岡町民、そして浪江、双葉、大熊の町民がいます。そのような方たちと一緒に楽しめるようドアを開いていただければ非常にありがたいと思います。

藍原：今日は4人のパネリストの皆様に、厳しい現実もあって、現場の具体的なお話、そしてご自身が感じたことを率直に、ご自分の言葉でお話しいただきました。本当にありがとうございます。

今回、福島から発信したこと、福島に向けて発信してくださったこと、これがずっと続いていることを期待するとともに、そのひとつのきっかけとして、今日がまた種まきの一歩となることを心から願いながら、私たちも福島でこれからもずっと取り組んでいきたいと思います。

特定非営利活動法人全国女性会館協議会全国大会in福島 バス観察

バス観察では、避難指示解除となった地域を訪れ、震災から6年が経過した福島の現状をご覧いただき、現地の方のお話を伺いました。

行程 平成29年12月3日(日)

- 7:45 ①岳温泉「光雲閣」発 (二本松市)
- ↓
- 9:50 ~ ②川内村コミュニティセンター
- ↓
- 12:00 ~ ③請戸小学校 (浪江町)
- ↓
- 12:15 ~ 浪江町役場
仮設商店街まち・なみ・まるしえ (休憩)
- ↓
- 13:00 ~ ④道の駅「南相馬」(休憩)
- ↓
- 昼食 (車中)
- ↓
- 14:00 ~ ⑤飯館村交流センター「ふれ愛館」
- ↓
- 振り返り (車中)
- ↓
- 16:15 解散 福島駅 西口



②川内村コミュニティセンター



遠藤 雄幸 川内村長

村民の方の「戻る」「戻らない」の選択を尊重し、村の誇りを取り戻すとともに、被災地脱却に邁進していきたいとお話をいただきました。



菅野 典雄 飯館村長

村民一人ひとりに寄り添った復興を目指すため、「までいな暮らし」のための取組についてお話をいただきました。

秋元 洋子さん 川内村婦人会長



震災後、「かわうちへ迎える会」を立ち上げ、「絆のひろば ひまわり」の運営等、仲間と協力し、村での日常を取り戻す活動についてお話をいただきました。



渡邊 とみ子さん

までい工房美彩恋人代表、元NPO法人かーちゃんの力・プロジェクトふくしま理事

あぶくま地域の「かーちゃん」達の活動、イータテベイクじやがいも、いいいたて雪つ娘がぼちゃんの生産加工販売の再開までの道のりをお話をいただきました。



事業レポート

知っておくと安心。

法律とお金の話

～離婚編～

離婚・人生のリセットをする前に必要なこと

想い

どうして離婚がしたいのか
どんな生き方がしたいのか

稼ぐ力

養育費を当てにしない生活設計
長期間稼げるスキル

健康

心身ともに健康であること
病気等で働けないときは公的な窓口で相談すること

各種研修に当センターをご利用ください



平成 29 年 11 月 10 日にお茶の水女子大学付属高等学校と埼玉県立浦和第一女子高等学校の皆さんの「教育旅行モニターツアー～福島に来て、学び、考える！ふくしま『学宿』」と、同年 12 月 23 日に立命館中・高等学校の皆さんの「SGH 東北復校防災研修」で当センターの研修室、宿泊室をご利用いただき、当センター職員が講師として東日本大震災と原発事故後の当センターの取組についてお話ししました。

当センターには、研修室、宿泊室、レストランがありますので、宿泊を伴った研修にご利用いただけます。



福島県男女共生センター企画調査課
電話：0243-23-8303

平成 29 年 11 月 16 日に女性の
人権啓発事業「知つておくと安心。
法律とお金の話～離婚編～」を開催しました。

第 1 部では、いわき法律事務所の菅波香織さんをお迎えし、離婚の基礎的な手続きの仕方や生活費・養育費などのお話、また、保護命令や DV 関連について教えていただきました。要件はありますが弁護士費用の負担軽減制度もありますので、自分自身が後悔しない選

択ができるよう一人で抱え込まず、早めに相談することが大切です。

第 2 部ではファイナンシャルプランナーの宍戸美香さんから、リセッティングとして、必要な経済力や生活力について具体的にお話いただきました。人生を再び歩み始める上で、自分を「応援してくれる人」を見つけておくことも大事です。

くるみんマーク・プラチナくるみんマークについて

福島大学 4 年 水間 あづさ

できます。県内では、東邦銀行が事業所内の保育施設の設置や育児に関する休暇制度の拡充、男性の育児参画に向けた取組等を行っており、このような企業が増えることを期待したいです。

将来、私は仕事と家庭を両立して働きたいと考えています。そのため、子育てサポートに力を入れている企業が一目でわかるこの認定マークは、企業選びの際にとても役に立ちました。これから就職活動をする人だけではなく、他の企業で現在働いている人、仕事と子育てを両立して働きたいと考えている人にもっと知ってもらいたいと思いました。

〈参考ページ〉

- ・厚生労働省ホームページ
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/shokuba_kosodate/kurumin/index.html
- ・東邦銀行ホームページ
http://www.tohobank.co.jp/news/20170518_004916.html



皆さん、子育てサポート企業として厚生労働大臣の認定を受けた証である「くるみんマーク・プラチナくるみんマーク」をご存知でしょうか。

私は就職活動の際に、企業説明会でいただいたパンフレットにこのマークが記載されていたことをきっかけに、認定された企業を意識するようになりました。

「くるみんマーク」は平成 29 年 12 月末時点で 2848 社が認定されています。さらに、高い水準で継続した取組を実施している企業は「プラチナくるみんマーク」の認定を受けることが

福祉機器を展示しています！

当センター 1 階の福祉機器展示室は、福祉用具・ユニバーサルデザイングッズを「見て、触れて、体験する」ことができます。展示している福祉用具をご紹介します。



ごっくんチェッカー

食事の時の飲み込みの音や呼吸の音が聴き取りやすくなるので、安心・安全に食事介助を進めることができます。



介護シューズ

軽くて脱ぎ履きしやすく、長時間履いても疲れにくい靴です。つま先とかかとが少しあがっていることで、つまずきを防止し、スムーズな着地や蹴り出しができます。甲高・幅広な方にもおすすめです。

問合せ 福島県男女共生センター福祉機器展示室 電話：0243-23-8316



ワーク・ライフ・バランスに取り組む企業

今回は、喜多方市に本社がある荒川産業株式会社社長の荒川健吉さん、経営企画室の星幸恵さん、二瓶由美子さんにお話を伺いました。

WLBに関する具体的な取組

有給休暇の他に育児介護休業及び看護休暇を設け、休暇の取得促進に取り組んでいます。男女共に育児休業の取得は就業規則に明記していますが、まだ男性が育児休業を取得した実績はありません。ですが、就業規則に明記する前の平成20年に、男性社員が育児のために有給休暇を利用して1ヵ月間休業しました。社会的に男性の育児休業取得に取り組み始めた時期でしたし、本人の希望に添えるようにしました。

看護休暇は男女共によく利用されています。共働きが増え、核家族化が進んだことで子どもに何かあつたらどちらかが仕事を休まなくてはいけない家庭が増えたからだと思います。時代の変化に合わせた仕組みと運用が必要だと考えています。

その他、セクハラ・パワハラに関する相談窓口を設置しており、設置当初は当社の女性執行役員が対応していました。女性管理職のロールモデルとしても当社に欠かせない存在です。

昨年から個人の成長を促す「成長確認シート」を使用し、全社員がキャリアプランを作成しています。将来から逆算して1年ごとに目標を設定して取り組んでいます。「成長確認シート」をもとに上司と評価面談を行っています。この評価制度は、会社の考え方を示すことができる一つのものさしだと考えています。



お話を伺った荒川健吉さん

荒川産業株式会社

住 所：喜多方市字屋敷免 3960 番地（本社） 業 種：鉄・非鉄スクラップ各種、古紙等リサイクル業
従業員数：社員 103 名（うち女性 23 名） ※平成 29 年現在

WLBに関する取組の成果・効果に対する期待

多様な人材が働ける会社になることを期待しています。当社では5年前にNPOを立ち上げ、障がい者の就労継続支援のため事業の一部を担っていただいている。障がい者も高齢者も男性も女性もやりがいと満足度を持って働く職場になるようにしていきたいと思っています。仕事のために家庭を犠牲にするのではなく、仕事もよくなるから家庭もよくなるという相乗効果が生まれればうれしいです。また、人生の中でも様々なライフイベントがあり、働くことに制限が出てしまう時期もあるかもしれません。そんな時は社員同士支え合えるような、恩送りができる職場にしていきたいです。

今後、働きたいと希望する人を受け入れるためには、家庭の事情が多様化する時代の変化に合わせ柔軟な制度の運用が求められていると感じています。社員のニーズに耳を傾け、一緒に解決策を探していくたいと思います。

経営企画室 室長 星 幸恵さん

「当社は昔から性別に関係なくチャレンジする機会があり、昇進に関しても同じです。毎月の面談や改善提案制度等、日頃、考えていることを話しやすい制度だと思います。多様な人材が働ける働きやすい職場をみんなでつくっていければと思います。」

経営企画室 二瓶 由美子さん

「『成長確認シート』が導入され、仕事のことだけではなく、スキルアップについても明確になりました。また、評価面談では自分の仕事がきちんと評価されていると感じ、次も頑張ろうと思います。その他、月1回の上司との面談では相談もでき、アドバイスをいただくことで、新たな気づきもあります。」



※当センターに対する御意見・御質問等がありましたら、下記までお問い合わせください。

(公財)福島県青少年育成・男女共生推進機構 福島県男女共生センター(女と男の未来館)

〒964-0904 福島県二本松市郭内一丁目 196-1

TEL (0243)23-8301㈹ FAX (0243)23-8314

ホームページアドレス：<http://www.f-miraikan.or.jp>

メールアドレス：mira@f-miraikan.or.jp

女と男の未来館

PR TIMES